

原爆文学研究会報

第六十八号

原爆文学研究会 二〇二三年五月

三島由紀夫「美しい星」との三十年

及川 俊哉

三島由紀夫の「美しい星」は、一九六二年に発表された小説です。二〇一七年に映画化され、二〇二二年には英語にも翻訳されました。小説の舞台は埼玉県の飯能市で、この町に住む大杉重一郎という中年の男性が、ある日円盤を見て「自分は火星から来た宇宙人だ」という意識に目覚めます。当初重一郎を笑っていた家族も、次々に宇宙人意識に目覚め、地球の人類を核戦争による滅亡から救済しようと活動を始める。一方宮城県仙台市には、白鳥座の惑星から来たという意識に目覚めた羽黒という大学教授を筆頭にした三人組があり、この一派は地球人を滅亡させることを目的としています。大杉重一郎の家を訪れた羽黒らは重一郎に論争を仕掛ける。重一郎は羽黒らにうまく反論できず、敗退。羽黒らは意気揚々と引き上げていきますが、重一郎はその後癌を患い、重篤な状況に陥ります。最後に重一郎に宇宙意志の声が聞こえ、病院を抜け出すとそこには……、というお話です。およそ三島らしくない小説で、発表当時の「図書新聞」の書評では酷評されています。

私はこの小説を高校生の頃に読み、その内容に衝撃を受けました。自分がかれまで読んできた小説とまったく異なる印象を受け、岡本太郎ではないですが「なんだこれは？」という疑問符が頭から離れませんでした。「自分が宇宙人だ」という意識を持っている主人公」も突飛ですし、悪役の羽黒一派に負けてしまうのも奇異に思いました。最後に主人公が

癌で死にそうになってしまいうのも、こうした小説のオチとしては奇妙に思いました。とにかく謎だらけの小説だったので。学部から大学院まで、のめりこんで研究した結果、新約聖書のキリストの生涯をなぞった構成なのではと考えるようになりました。その論証は論文⁽¹⁾に書きましたので、詳細はそちらをお読みいただければと思います。概略だけ述べます。三島が十四歳のころに書いた「第五の喇叭」という詩と、表紙において共通する点が複数あることがわかりました。「第五の喇叭」という作品は、黙示録を題材にした作品です。この詩を踏まえて「美しい星」を読み直すと、実に様々な要素が、福音書のキリストの生涯記と符号の一致をみるのがわかってくるのです。家族はそれぞれ、妻がキリストの弟子のペテロにあたり、長男一雄は裏切りのユダ、長女暁子は聖母マリアと随天使ルシファアの役割を果たしていることがわかりました。羽黒一派はキリストを問い詰める悪魔です。これは最近判明したことです。主人公の名前の「重一郎」は「一」と「一」とを「重」ねると「十」になることから「十字架」を名前に負うキリストの暗示になっています。このように、三島は小説内の至る所に「この小説をキリスト教の文脈で読むように」という手がかりをちりばめているのです。さて、では、この小説をキリスト教の視点で分析してみようとすると、これが非常に難しい。福音書ではキリストは悪魔の三つの試しをしりぞけ、「悪魔よ、去れ」と告げて勝利しています。しかし大杉重一郎は負けてしまいます。では、この小説はキリストを揶揄する小説なのでしょうか。そうとも言いきれないのは、重一郎が最後に死に赴くからです。キリスト

教の信仰ではキリストの刑死は人類を救済するための贖いの死であるとされています。キリストは弱い神ですが、その弱さによる刑死が信仰者の栄光を証明しています。高校生の私にとって、重一郎の死に向かう姿勢は、現世を超えた価値への志向を暗示のように受け止められ、いわば一種の宗教体験のように感じられたのでしょうか。これが「謎」の正体であり、今も自分を研究に駆り立てる動機になっています。なお、急いで付け加えると、私は三島の晩年の天皇制への傾倒には一切共感していません。三島の死についても考えていることはあるのですが、限られた字数内では説明できないので割愛します。

院生生活の終りの頃、現在原文研の柳瀬善治さんとお会いして、面識を得ました。山中湖畔の三島由紀夫文学館での研究会に参加した際に、近所の食堂で「ほうとう」を一緒に食べたのを覚えています。自分の力不足もあり、高校の国語教師として就職し多忙になったこともあって、大学院修了後は研究発表をすることは中断していました。その後はポチポチと資料集めなどをしていましたが、あつという間に二十年が経過してしまいました。しかし、昨年度の健康診断で精密検査を受けることになりました。幸いなことに何でもなかったことがわかりましたが、検査結果が出るまでの数週間、「命に関わるようなことになるなら、これまでの研究を世に問うてから死にたい」と強く思いました。そこで柳瀬さんに連絡を取り、原文研に加えていただいた次第です。

高校生の時から教えれば、はや三十年も「美しい星」にかかわっていたことになりました。今年中に「原爆文学研究」に投稿したいと考え現在論文を執筆中です。内容は、「美しい星」の前提になっている円盤と宗教と核兵器の関係です。これらが密接に結びついていることを論証したいと思っていますが、こんな三題噺にうまくオチをつけられるかどうか、

今から先が思いやられます。いつか皆様と研究会の発表の場でお会いできることを楽しみにしております。

【注】

(1) 「及川俊哉オフィシャルサイト」 ([https://syunya-](https://syunya-otkawa.com/prod/)

[otkawa.com/prod/](https://syunya-otkawa.com/prod/)) にスクリーンデータを掲載しております。

第六十八回 原爆文学研究会報告

二〇二三年三月二十五日(土)、第六十八回研究会を開催しました。前回はオンラインでの開催でしたが、今回は対面とオンラインのハイブリッド形式での開催となりました。

対面での研究会の内容は盛りだくさんでした。〈研究発表1〉は楠田剛士さんによる「詩誌「炮氓」の原爆表現」、〈研究発表2〉は鳥羽田恵美子さんによる「私の継承——中学校国語における『原爆文学教材』研究」でした。

後半のワークショップは「平和教育を問いなおす」という題で、まず司会者の後山剛毅さんから「平和教育における原爆体験の継承可能性／不可能性」とし、広島の平和教育の歴史の変遷がまとめられました。報告は〈1〉新木武志さん「平和教育のなかの原爆——長崎の平和教育がめざす平和とは」、〈2〉西河内靖泰さん「平和教育」の歴史を語る」の二つが行われました。

今回の研究会では、いずれの発表の中でも、発言者の個人的な経験を交えながらの発言がありました。対面開催ならではの雰囲気だったと思います。

◇研究発表1

詩誌「炮氓」の原爆表現

楠田 剛士

長崎の原爆表現史を考えると、山田かんの仕事を抜きに考えることはできない。山田は長崎原爆を主題として、詩を書き詩を批評したが、一九八四年にまとめられた『長崎・詩と詩人たち―反原爆表現の系譜』（汐文社）は、長崎の戦後詩史、原爆文学史としていまでも重要性を失っていない。

本書の初出は、山田が編集を務めた詩誌「炮氓」（ほうぼう）の連載である。「炮氓」は一九六八年九月に創刊し、七七年一二月の終刊まで五一号を出した。誌名は、「「やかれるたみ」「炮烙の刑」に処せられた無辜の民を象徴」（創刊号あとがき）する山田の造語であり、反原爆を意識したものになっている。六一年から六五年まで山田が編集発行していた詩誌「橋」の後継としても原爆というテーマが連続している。創刊号は建物被爆や被爆者を描く詩や、戦争、戦死者、ベトナム戦争に関する作品を掲載し、特集号として「長崎被爆二十五年特集」（二一号）、「被爆後二十八年特集」（二七号）などを企画した。特集と銘打たなくとも原爆・戦争に関する作品が各号に掲載されたが、それ以外の主題も多い。宮原隆之助は小児麻痺の娘について、入江昭三は大陸での孤児体験・引揚体験についての作品を多く残し、中川弘美は廃坑という新しいテーマを雑誌にもたらした。栗原貞子など同人以外の寄稿もあった。「炮氓」の同人は、山田が幹事長を務めた長崎県詩人会に所属する者が多く、彼らの高い創作意識は掲載作の前衛性・観念性にも反映した。少しずつ同人を増やしながら、七〇年代の長崎県内の詩人の結び付きを形成した。同人増加やテーマの拡大は、一方で原爆というテーマが希薄化する側面もあり、同人の盗作問題が起こり終刊を迎えた。山田自身は、

雑誌の編集や図書館職員としての業務を行いながら、「「炮氓」」発行期間内に三冊の詩集、『記憶の固執』『腐蝕する暦日の底で』『アスファルトに仔猫の耳』を出し、その後も「炮氓」掲載作を収録した詩集『予感される闇』と評論『長崎・詩と詩人たち』を出して、反原爆の意識を持續させている。こうした雑誌や山田の状況と、当時の文化運動や被爆者の証言活動との関わりについては今後の課題としたい。

◇研究発表2

私の継承

——中学校国語における「原爆文学教材」研究

鳥羽田 恵美子

今回の発表は、一言で言うなら、個人的な「私」が個人的な「私の父親」の原爆体験を、どうやって、知ることになり、これから、どうしようかと考えたという多重構造の問題提起であった。

この問題に答えるためにはいくつかの観点に分けて、考える必要があった。まず一つ目の観点は、父親が原爆についてなぜ何も語らなかったのかということである。このことを考えたときに私の脳裏に交錯したのが、朽木祥氏の「八月の光」の中の『水の緘黙』であった。彼女の「八月の光」は『雛の顔』『石の記憶』『水の緘黙』という三部から構成されており、この三つの話が紡ぎ合わされて、最後に「八月の光が、あたりに満ちていた。」という文で、見事に昇華されていく。私が、父の「沈黙」を朽木氏の『水の緘黙』という物語の「緘黙」という言葉に置き換えたのには次のような理由がある。自分からは絶対に話さない。話すこととはない。話さないことで、生き残った我々は強く生きていくのだという原爆に対する反逆的な決意を父の「原爆の子」という文章から読み取ったからである。

ではなぜ、私が語ろうとするのかという観点である。中学国語教員になった私は「碑」という教材に出会ったことで、原爆の記憶を継承しなければならぬと自覚してしまうのである。このつながりは、先の朽木祥氏の「八月の光」を読み解いた時に、より強くなった。なぜならば、『雛の顔』は、原爆に遭って亡くなっていった人々の顔を象徴する。そして、その亡くなった人々のことを石は記憶してくれる。物語の中では『雛の顔』の昭子が、母や自分の代わりに亡くなったであろう中学生の顔を思い出す。『石の記憶』で光子は忽然と目の前からいなくなった母を石の影としてみつける。石が母を記憶してしてくれたと感じ救われるのである。しかし、その影は闇にのみ込まれていく。ここで、最後の『水の緘黙』という物語に入るのであるが、その前に「ウーティス―ダレデモナイ」という『オデュッセイア』第九歌「キュクロプス物語」に寄せる頃という詩が挿入されている。この詩がここに存在する意味は大きい。なぜならば、詩に登場する影の仲間たちとは、原爆で亡くなった人々のことであり、生き残って自分だけが残ったことを強く悔いている人のことでもある。影たちが影を追いかけて影である僕はついに自分の名前もわからなくなる。ダレデモナイのである。この「ダレデモナイ」という言葉は、「意味がない。だれでもいい」という言葉に置き換えられるのではないか。確かに、あの日、原爆で亡くなった人々は意味もなく殺されていき、残った人たちにも何かの意味があつて、固有性により、生きられたわけではない。だれが生き残り、だれが死ぬかはわからないのである。ただ、事実を、あの日一九四五年八月六日そして、八月九日、ヒロシマで、ナガサキで、原子爆弾という科学兵器を人間が受けてしまったということを記憶することが大切なのである。それを、誰かの記憶ではなくみんなの記憶として私たちの記憶として語ることができたときに、『水の緘黙』の主人公である「僕」も救われ、私（鳥羽田自身）にとっても原爆の記憶を、継承することになるのだと考える。

私の継承（教材研究）はこれからである。研究発表の後の質疑応答ではたくさんの皆様から貴重なご意見をいただいた。そのおかげで、混乱した私の頭の中を整理できた。まず、父の緘黙の意味、そして、どうしてそれを語ろうと考えたのかは、教材「碑」と「八月の光」という本に出会えたからであったことを、この事後報告の場を借りて確認したい。

◇ワークシヨップ「平和教育を問いなおす」

◇司会者から

平和教育における

原爆体験の継承可能性／不可能性

後山 剛毅

本発表は、ワークシヨップ企画「平和教育を問いなおす」の問題提起としておこなったものである。なお、前半の平和教育の歴史については、発表者の博士予備論文（修士論文相当）と立命館大学人文科学研究所紀要に投稿した論文「ヒロシマの原理―一九八〇年以降の原爆表象を中心に」（二〇二〇）の内容を元にしていく。

これまで広島市の平和教育の歴史は、被爆教職員の会による平和教育に注目する形で整理・記述されてきた。一九八〇年代末から一九九〇年代にかけて、被爆教師たちの現場からの引退（定年）にともない、「平和教育運動」は衰退していった。この時期に平和教育を主導し始めるのが、広島市教育委員会である。

本発表では、それぞれの組織が刊行した平和教育の教材とその内容を紹介し、教材のなかの原爆体験表象の変化を、文字や証言をベースとしたものから、イメージを喚起するような遺物や遺物をテーマとした絵本へと変遷していることを示した。とくに一九八〇年代後半に刊行数が増

加する「原爆絵本」という新たなメディアによって平和教育が支えられていることを示唆した。

二〇二三年二月八日に平和教育の教材である「ひろしま平和ノート」から『はだしのゲン』が削除されるという発表があったことに触れて、その削除部分の一部で「漫画の一部を教材にしているため被爆の実相に迫りにくい」という理由が挙げられたことに注目し、日常会話でも珍しい「実相」という言葉が、いつ被爆体験と結びついたのか歴史的に整理した。

そこで明らかになったのは、公的には一九七八年の荒木武市長(当時)による平和宣言のなかで、「被爆の実相」がはじめて使用され、平和宣言のなかで計九回(一九七八、一九八七、一九九六、二〇〇七、二〇一二、二〇一四、二〇一六、二〇一七、二〇二二)登場していることである。この言葉自体が広島市行政のなかで常用され始めるのは、二〇〇六年に始まった広島平和記念資料館の展示整備計画のなかであり、二〇一一年に策定された「広島平和教育プログラム」のなかでは、重要なキーワードとなっている。このように平和宣言のなかでの使用頻度の増加時期と市行政のなかでの「被爆の実相」の定着は同時期であり、「被爆の実相」は決して、古くから一般的に使用された言葉でなく、ヒロシマの記憶をめぐるポリテクスのなかで選り取られた言葉であることを指摘した。

質疑応答では、「被爆の実相」という言葉は、一九七七年にはすでにあったという貴重な情報をいただいた。またその後の調査で、長崎の平和宣言では使用されていないことが分かった。こうした調査からも広島・長崎間での比較検討が必要である。今後は、これらの資料収集と整理をおこなって、論文にまとめようと考えている。

報告 平和教育のなかの原爆

——長崎の平和教育がめざす平和とは

新木 武志

原爆を中心とする平和教育は、被爆体験の風化・断絶が進んでいると危機感をもった広島市の被爆教師が、広島県教職員組合の支援で結成した広島県被爆教師の会によって始められた(一九六九)。そのなかで原爆を教えることの意味として、(一)「核時代」認識のもとで、人類が生き抜くため、(二)軍国主義復活という現実把握のなかで原爆投下は帝国主義者の軍国主義的政策の本質を示す、という二点が示された。

長崎でも、同会からの働きかけによって被爆教師の会が結成され(一九七〇)、『ナガサキの原爆読本』を編集・発行するなどの取り組みが始まったが、長崎市教育委員会は、「『原爆を原点とする』ものではない」とする原則を示した。組合の支援を受け、帝国主義戦争論の立場をとり、アメリカや日本政府の安全保障政策に批判的な平和教育は認められなかったのである。

そのため、長崎での原爆を中心とする平和教育は、長崎市教委との対立関係のなかで取り組まれることになったが、拠り所とした帝国主義戦争論は、ベトナムのカンボジア侵攻など社会主義国間の戦争という現実の前に説得力を失っていった。一方、一九八〇年代には核戦争の脅威のもとで、原爆被害を伝える取り組みは国際世論や市民に支持され、長崎市教委も小学生の原爆資料展示の見学などを推進しはじめた。

しかし、冷戦が終結し、核戦争の脅威が後退すると、原爆被害が切実に受け止められない状況も生まれた。長崎市教委は、二〇〇一年に、『原爆を原点とする』ものではない」という原則を削除し、「被爆体験を継承し、平和の大切さを発信できる児童生徒の育成に努める」ことを示したが、このような平和教育に対する生徒の「押しつけ」感や「うんざり」

感が報告されるようになった。さらに、人類生存のために核と戦争を否定してきた平和教育に対しては正戦論が台頭した。原爆被害を世界に訴えるために、日本の侵略戦争や加害責任を重視するようになったことは、他の戦争被害によって原爆被害が相対化するという状況も生み出した。そして現在、アメリカや日本政府の安全保障政策について考えようとする平和教育は、依然として忌避される一方、積極的平和の概念にもとづき、構造的暴力の問題についての生徒の主體的な学びを重視した実践が重視されている。そのなかで、原爆や戦争のリアルは伝えられているのだろうか。

彙報

第六十八回 原爆文学研究会

○日時 二〇二三年三月二十五日（土）

○会場 於・福岡大学 ※ハイブリッド形式で開催

○研究発表 1

詩誌「炮氓」の原爆表現

楠田剛士

○研究発表 2

私の継承―中学校国語における『原爆文学教材』研究

鳥羽田恵美子

○ワークショップ「平和教育を問いなおす」

司会者…後山剛毅 報告…新木武志・西河内靖泰

編集後記

まず、ワークショップ「平和教育を問いなおす」の報告者のお一人である西河内さんの報告文ですが、諸事情により掲載を見送りました。お詫びしてお知らせ申し上げます。

さて、巻頭エッセイは及川俊哉さんをお願いいたしました。頂いたエッセイを一番に読めるのは編集の特権ですが、三島由紀夫「美しい星」についてのご研究が近々拝見できるかもしれないとのこと、楽しみにしております。この度はご寄稿ありがとうございました。

第六八回原爆文学研究会はハイブリッド形式で行いました。坂口博さんが、対面参加者に、花田俊典さんのお宅の被爆樹で作ったコースターをお土産にと配ってくださいました。ありがとうございます。帰宅後、コースターは早速リビングに飾りました。

五月一八日から二二日まで、広島でG7サミットが開催されました。サミットは「世界の平和と持続的な発展に向けた対話の場」とされています。岸田首相の議長国スピーチの中では、「被爆の実相」という言葉が繰り返されました。今回の原文研での発表や議論を思い出しつつ、実況中継を見ていました。

さて、今回も執筆者の皆さんはもちろんのこと、世話人会の皆さんにもたくさん助けていただきながらの編集となりました。日々勉強させて頂いております。今後ともよろしく願っています。

最後になりましたが、改めて研究会にご参加いただいた皆様、会報への執筆をご快諾いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

(樫本 由貴)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八二四・〇一八〇 福岡市城南区七隈八・一九・一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631 URL <http://www.genbunken.net>